町民文芸

只見短歌会　令和八年五月詠草

病む身より言葉は無くも学び有りそれを糧とし日々を送りぬ　目黒　富子

只見小校庭桜満開や陽ざしに映えし輝き見ゆる　関谷登美子

若芽萌ゆ園庭の中はづむ声息子の向かふは初夏のひかりか　立花　奏音

つながりし輪切りのネギを持ち上げてにこやかに孫は「ネギのトンネル」と　新国由紀子

生い茂る緑のなかに紫の桐や藤の花盛りとなれり　渡部ヨリ子

只見俳句会　五月定例会

アカシアの花蜂飼（はちかい）の目となりて　恒夫

青田風万人堂へ渡りくる　修一

春の日や木漏れ日注ぐ秋生の碑　つかみたし天宮の空夢と星　信

雲緩み呼吸するごと山笑う　目に染むやブナの新緑只見線　都

秋生の碑青空へ溶ける山つつじ　秋生の碑生家へ続く青葉道　味代子

吟行（ぎんこう）の片手にスマホオキナグサ　タンポポや芝生を走る綿毛かな　一恵

何見ても友の面影河鹿笛（かじかぶえ）　翁草童話作家の碑のそばに　真理子

祈りたしサラサドウダンいつまでも　ゾックリの若菜間引いて味噌汁に　睦子

鳥が舞うそよ風そよそよ花吹雪　春がすみ畑仕事に精を出す　尚幸

蛙の子水辺をはねる晴れの下　水音や沢の上舞う揚葉蝶（あげはちょう）